

続

徒然  
つれづれ

## 毎日が活躍日

桑野 巍

夕方時の電車の中の風景異変に気付いて久しい。新聞、雑誌などを広げている人はごく少数派、携帯電話とにらめっこしている人が多数派なのだ。他人の行動を横目で見るのは失礼だが、携帯を開けていない人も時折思いついたように開けるから不思議だ。この光景を見て現代の働き蜂たちの手先の器用さに驚く。何を見ているのかの疑問にもぶつかるがのぞき行為は禁物、まして近づくのはエチケット違反だ。

時間を気にして時計替わりに携帯を開く人も多らしく、この人たちは見たあと眠りにつく疲れ人で大物だ。時間ばかり気にしている人は小心者と仕分けしてみた。何分に駅に着くからと自宅に連絡しているのはマイホーム型でほのぼのの家族を連想する。約30分の車中だが人の動きと時間の流れが観察できて、何だかこちらも若返った感じだ。

過ぎて行く時間は誰も止めることが出来ないが、近ごろ与えられた時間は平等ではないと思うことが多くなった。年齢のせいだろうか。一説によると、20歳代のころの過ぎ行く時間の速さを1とすると、30歳代で2倍、50代で5倍の速さという。わが身の経験則からみると当然とも遠からずというところか。それにしても日本人はよく働く人種、その昔戦争時には月月火水木金金といわれ、土曜日曜という休日はなかった。そのころの人たちの過ぎ行く時間の速さはどうであったのだろうか。それに引きかえ現代人は休日が多く、ハナ木<sup>モク</sup>とかハナ金<sup>キン</sup>には“放課後”の夜が楽しめるのだから羨ましい。

時間の有効活用は簡単なようで難しいが、国会議員や地方議員は時間をどう使っているのか、土曜日曜祝日の活用法や中身も知りたくなった。休日を返上して議案の審議に熱中し「これぞ国家国民のため、地域住民のため」という犠牲意識をお持ちかどうか聞いてみたくなった。まさか報酬が少ないからとは言わないだろうし、議員数が多過ぎるからとは言わないだろう。また「脱官僚」と唱えているから行政側に迷惑をかけたくないからとは言わないだろう。

「官僚たたき」が票につながる時代かも知れないが、有権者側からみると政治家と官僚は仲が悪いという印象を受けてしまう。本筋は「政官協働」でな

くてはならないのだから政、官の職にある人たちは互いに議論を重ねその過程と結論を国民に公開してほしい。例えば、国や自治体の借金はいまいくらで、それは最悪の水準まできているのか、どのように返済し、いつ正常な会計に戻すのかを協働で取り組み、展望を示してほしいのだ。

多くの納税者、有権者は心配症で、借金の支払い者は誰なのか、利息はどう支払うのか、どうして借金がかさんだのか、国民（住民）に甘えがあったのか、ねだる人、せがむ人が多かったのかななどの正答を求めていると思う。私の目に映るのは「甘やかし優先の平和国家で借金大国」。それなのにいつも自分たちが選んだ政治家に叱られているように思えてならないのだ。

心配屋の発想は参考にならないが、行政体の財政や借金は20年後にどうなっているか、先ヨミは難しい。20年後の天気予報を出すことも難しいが、財政再建完了の見通しも難しい。現在30歳の行政マン（ウーマン）とて20年後には間違いなく50歳に到達する。この人たちは公務を司る中心的存在に成長しているだろうが、体力、気力、精神力に個人差が出てくる年ごろともいえる。行政職員はプロ集団、健康体を維持しつつ自治体の将来像を編み出してほしい。すべての施策の総点検と住民に勇気を与える方策を早く公開してもらいたいのだ。

政治家の発する言葉は聞こえはいいが、再構築の工程は信じ難い。何でもかんでも政治がやるのではなく、政官協働とはいえ官が中立性を保ちつつ“再建”に取り組むことが肝要だ。そのためには行政面では女性職員に主導権を委ねたらどうか。頼りなくてだらしない男性たちに比べ、女性は細やかさと大胆さ、ねばり強さを持ち合わせているし、効率性も重視する。財政赤字や借金返済問題は並み大抵の努力では解決できないが、将来世代への愛情をいちばん重く受け止めているのは女性だ。この人たちは必ずや使命感を忘れず「毎日が活躍日」的精神を発揮してくれるだろう。

（自治大阪編集委員会顧問  
時事通信社元大阪支社長）